

大宅壮一 主筆

人物 評論

▼復刻版

▼全五卷別冊一

一九三三年三月〜一九三四年三月

菊判上製総一五四ページ

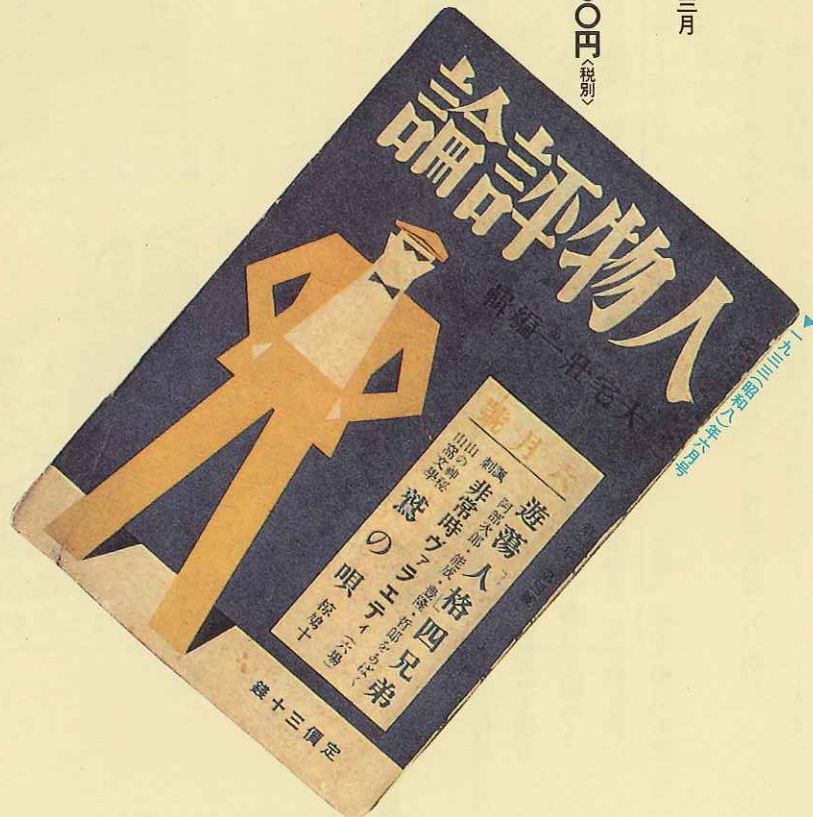
▼本体揃価格八五、〇〇〇円(税別)

▼尾崎秀樹《解説》

▼不出版



定州 價 定



定 十三 價 定

「この密閉された室内に、涼風をもたらず
ものは誰ぞ！」十五年戦争下の
閉塞的狀況下に旺盛なジャーナリズム精神を以て、
人物評論・社会時評を敢行した評論雑誌。
大宅壮一の批評精神を体现した『人物評論』を全号復刻！



▼大宅社
「人物評論」を発行していた頃
日本橋茅場町一九三二昭和七年



作家同盟親族會議之圖
—とこの當勸雄房林—

人物評論

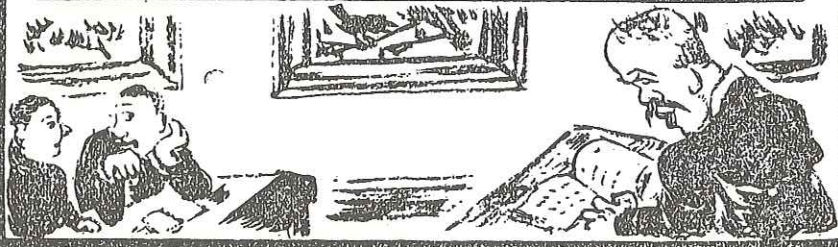
▼復刻にあたって

大宅壯一編集の評論雑誌である本誌は、一五年戦争下の閉塞的状況下に旺盛なジャーナリズム精神を以て人物評論・社会時評を敢行した雑誌である。
暴露記事「看板に偽りあり」「新人推奨」「人物内報」「チャイナリズム内報」や大学教授陣を揶揄した「低脳教授列伝」「インテリ・ルンペン第一課」のほか「プロ文化運動はどうなる?」「老社会主義者座談会」など風刺を伴いながら痛烈な批判精神が生きた評論のなかに大宅壯一の面目が躍如とされている。山崎今朝弥「堺利彦論」、林美美子「長谷川時雨論」、加藤悦郎「漫画地帯」など興味深い記事に加え、作家による評論・小説も多く、文学的にも貴重な文献である。尾崎一雄の「暢気眼鏡」もまた本誌で掲載されたものである。

「この密閉された室内に、涼風をもたらすものは誰ぞ!」(大宅壯一)。言論・表現の自由が封殺されゆく時代にあつて、約一年わずか一三号で終刊を迎えたものの、ジャーナリスト大宅の批評精神を体現した本誌が、近代文学史・思想史・ジャーナリズム史研究として現代のジャーナリズムに示唆するものは見過ごすことができない。ここに全号を復刻するものである。……不二出版

▼内容見本
一九三二(昭和八年)三月創刊号より

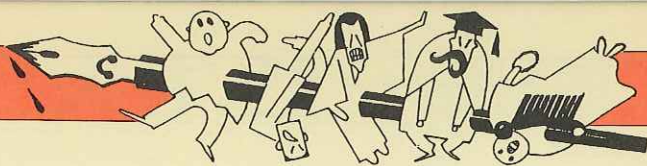
低脳教授列傳



東大文學部の巻

かつては小泉八雲とかケイ・ベル先生、或は又漱石、上田敏等の華々しい名を、所謂「赤門派」を出したといふところから、帝大の文科は藝文の花咲きにはふところと世間からみられてゐるらしいのであるが、今日中味を恭しく御開帳に及べば、とんだデクが現れましょうといふ、田舎道の名もない洞と選ぶなきと如何せんやである。象牙の塔と呼ばれて世間知らずの、學の蕙臭香高い、高潔な學者の殿堂であるならまだしも、コチコチの俗人揃ひでしかないのである。漱石がツキ返した「文學博士」の肩書きを分析してみれば、教授なるものの正體が知れよう。論文がどんなに「學的價值があつたとて、もし學界に對する貢獻——これは必ず帝大文學部の出身で、長年その飯を食つたといふことである——がなければ、それを貰へぬといふのであつてみれば、博士號とは横暴なる學閥の大本山のマ

イクであり、低能の證據に外ならないといふことがわかれれば、博士にならなくては教授になれないこと、の黄金律によつて教授とは何であるかと判断するであらう。さて吾々は以下順を追うて首實験に移ることしよう。
その最もいゝ例に、今滿鐵總裁におさまつてゐる、前の教育學教授、林博士(伯爵)がある。彼は「意志教育論」といふ論文で博士になつたのであるが、その講義たるや、ケルンシュユナイテルとかザイデルといふ名や獨逸語がビョーン／＼飛び出して神聖極まるものである。時には私の説はルン・オヤデカルトと暗合してゐたのを最近發見した等々と何の體面もなく、むしろ得意然たるあたり、全く文字通り伯爵の馬鹿殿様である。かくて學生たちは、多年十八世紀以前の學問に、高い授業料と貴重な時間を空費させられてゐた。だが、貴重な時間を空費せずとも、ただねむい眼をこすつて登校しただけで解放されることがある。と



当時の読者としての鮮烈な印象

小田切秀雄

〈文芸評論家〉

『人物評論』誌は、基本的には、今回の復刻版刊行の趣旨に書かれている通りのもので、一九三三年に、この雑誌の発行当時の読者だったわたしなどの受けた鮮烈な印象は、それを今すこし立入って分析してみれば、だいたいの趣旨通りということになる。

その当時、政府による検閲はひどさを増し、全体として言論表現の自由は大はばに制限されてきていたが、それでも、一九三三年、東京築地署で警視庁特高課の手によりプロレタリア作家小林多喜二が虐殺された時、その遺作となった中編小説『党生活者』の全文を、ただちに『中央公論』誌が題名だけ「転換時代」と変えて発表する、というような編集者としての気迫が示された時期であった。その同じ年の『人物評論』もまた、大宅壯一というまわめて個性的で野党精神にあふれたジャーナリストが、多くの知名無名の執筆者を動員して、『人物の評論』という形にいくらかずらしながらも、体制、政治、思想、学問、文学、風俗、等々、つまり当時の日本人の生活の全面にわたって、下からの新鮮な批評を展開したのだった。真正面からの批判もあるが、多くは風刺、揶揄、戯文、雑文等のしたしみ易い形をとりながら、みこことな批評が行われていた。

無名だった尾崎一雄の『暢気眼鏡』をこの雑誌の小説欄で読んで驚いたことその他、わたしには文学関係・思想関係・風俗関係のものがとくに新鮮だったが、それ以外のあらゆる面でもやはり、そういうことがあったと思われる。

大宅壯一のエッセンス

松浦総二

〈ジャーナリスト〉

大宅壯一編集の月刊誌『人物評論』は昭和八年三月創刊された。多喜二虐殺、滝川事件、ヒトラー抬頭の年で、ファシズムは吹きあれた。『人物評論』編集の特長は、第一にファシズムに抵抗。そのころ大宅は官憲に逮捕された。第二は『人物論』ジャーナリズムなる分野を開拓し、ジャーナリズムの先頭を走った。第三に記事の取材方法は、取材と執筆の分離である。戦後の週刊誌ブームの時代の取材方法である。二〇年後の週刊誌を予見したことになる。第四に『枕の阿部真、サワリの壮一、落ちの保』といわれた文章家大宅は冴えていた。第五に、編集者大宅の造語やタイトルは読者をひきつけ、雑誌は売れた。

『人物評論』は一年で廃刊。出資者と紛争のためである。以後、大宅は『戦場亡命』、戦後は猿取哲の筆名で復活。大宅ジャーナリズム第二期である。「無思想人宣言」から死までが第三期。第一期の大宅は左翼で全期間の中で一番魅力がある。『人物評論』は大宅壯一のエッセンスだ。



若々しい大宅壯一

鶴見俊輔

〈論者〉

私は大宅壯一を、その生涯でもっとも苦しい時期となった戦中にはじめて何度か見て、身のこなしと言動に信頼感をもった。

初期の著作活動を読んだのは戦後になってからである。その恐れを知らぬ批評活動には、しばしば勇み足が見られるが、中学生のころから店を経営して自活してきた長い経歴にうらうちされた野性があり、後年のゆきとどいた批評には見られないおもしろさがある。野性をうしながちな今日の日本人にとって、若い日の大宅壯一の主宰した『人物評論』は自分の位置を知る手がかりになると思う。

佐高信

〈評論家〉

大宅壯一の『怪物と黒幕』は私にとって、ある種の座右の書である。今度、復刻されるこの『人物評論』の目次を見て、「看板に偽りあり」シリーズの「ニセマルクス四兄弟」とか、そのほとんどがユニークなこの雑誌に載ったものであることを知った。

大宅壯一は、自身が卓抜な人物料理家であるばかりでなく、この男、あるいは、この女を誰に料理させたらおもしろいかを、はずれることなき独特の勘でピタリと当てる才能の持主だった。この雑誌は大宅のその両面の才が味わる。ここに盛り込まれている料理は決してしつこく論ではなく、豊富なゴシップによって組み立てられているのではない。下半身、もしくは中半身を手合もいるが、しかし、上半身のみで人間は形成されているのではない。下半身、もしくは中半身を含んで人間はある。政財界からスポーツ、映画、演劇に至るまで、さまざまな人物に焦点を当てたこの雑誌は、当時の時代の匂いと臭いを伝えるとともに、人間探究の宝庫として、第一級の資料である。

一応、経済評論家の看板を掲げている私は、経済を知らないという批判を受けても怯む者ではない。批判者の方がかっと知らない場合が多いからだ。しかし、人間を知らないという難じられたら、動揺する。大宅の主宰したこの雑誌を耽読し、経済は知らなくても人間は知っているぞと逆襲できるよつこになりたいたいと思う。

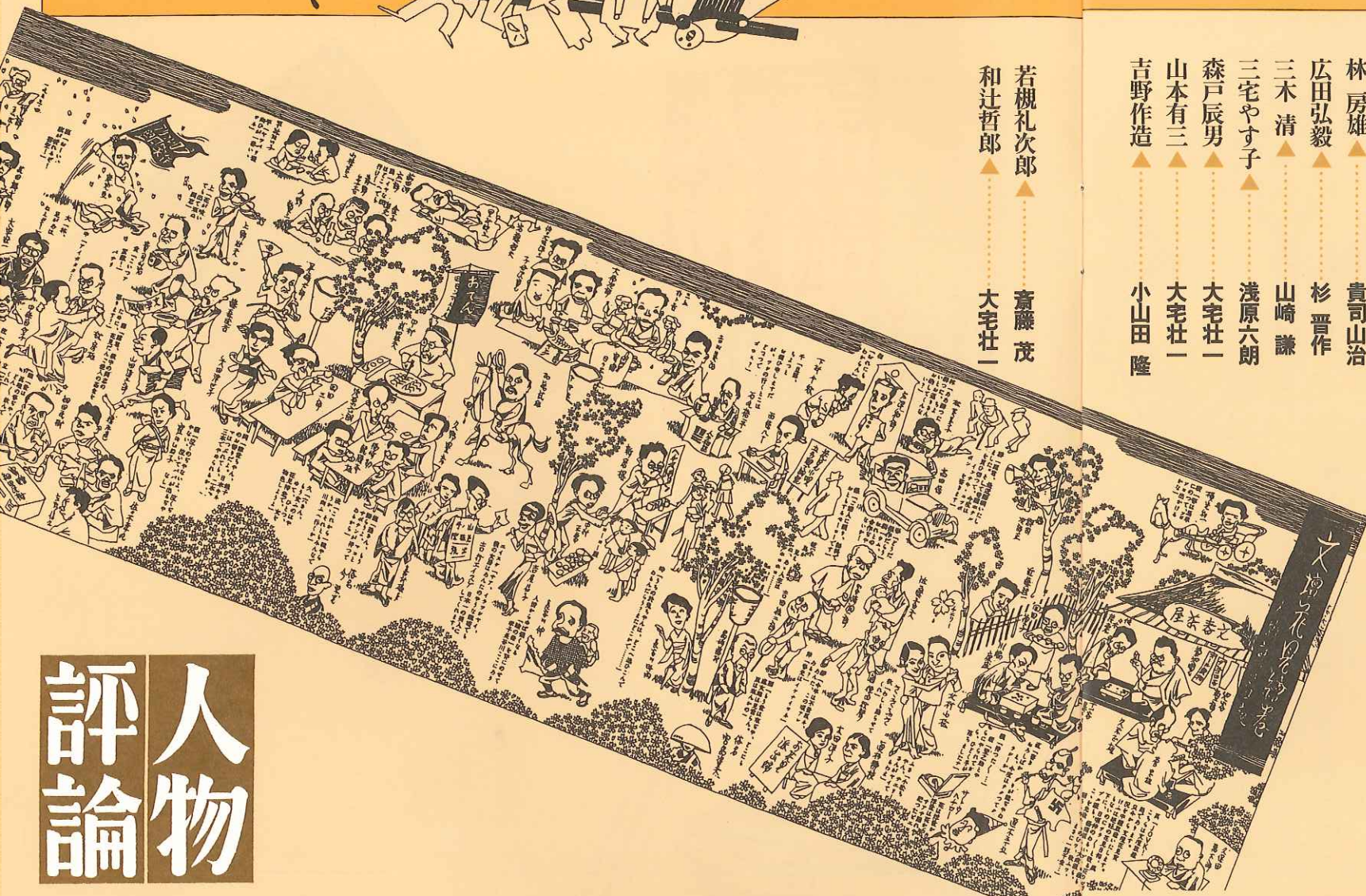
大宅壯一編輯

▼「人物評論」誌上で
評論の対象となった主な人物と評者

被評者	評者
芥川龍之介	江口渙
阿部次郎	大宅壯一
安倍能成	大宅壯一
梅原竜三郎	矢野文夫
大森義太郎	大宅壯一
片岡鉄兵	立野信之
片岡鉄兵	尾崎士郎
片山潜	山崎今朝弥
榎田民蔵	大宅壯一
小林多喜二	川口浩
小宮豊隆	大宅壯一
堺利彦	山崎今朝弥
向坂逸郎	大宅壯一
島崎藤村	大宅壯一
高野岩三郎	大宅壯一
戸坂潤	藤倉恒造
長谷川時雨	林美美子
長谷川如是閑	滋賀満男
林房雄	貴司山治
広田弘毅	杉晋作
三木清	山崎謙
三宅やす子	浅原六朗
森戸辰男	大宅壯一
山本有三	大宅壯一
吉野作造	小山田隆

若槻礼次郎 ▲ 斎藤茂
和辻哲郎 ▲ 大宅壯一

たい子を守る歌
——小堀甚二のために
歌へる
えらくなれ、たい子さん
その膝に、生死せん
虎三よ、去らば去れ
おいらは、たい子を守る



人物評論

▼関連図書のご案内

武田麟太郎 主筆
人民文庫 [全26冊・別冊1]

- 昭和11年～昭和13年刊
- 別冊 解説(小田切秀雄・総目次索引)
- 菊判・並製・総5、034頁
- 本体揃価格 180,000円
- 推薦 水上勉・小田実・池田浩士・長谷川啓

本誌は、『文学界』の有力同人として文壇をリードしてきた武田麟太郎が一部の同人の時局迎合的空氣に反発し、また周囲の若い作家に活動の場を与える意味もあって、創刊したものである。帝国主義の時代に苦惱する左翼文学者たちの最後の砦となった。

文芸時報社 刊
文芸時報 [全3巻・別冊1]

- 大正14年～昭和5年刊
- 別冊 解題(山内祥史・総目次索引)
- B4判・上製・函入・総1,208頁
- 本体揃価格 70,000円
- 推薦 青山毅・匠秀夫・保昌正夫・森本修

本紙は『文芸界』に於ける唯一の文芸新聞として創刊された文壇情報紙である。執筆者も当時の文壇を代表する大型・中堅の作家・評論家を揃え、また一九二〇年代後半の文壇の状況を舞台裏など様々な面から照射し、いきいきと映しだしている。

日本学芸新聞社 刊
日本学芸新聞 [全3巻・別冊1]

- 昭和10年～昭和18年刊
- 別冊 解説(香内信子・香内三郎・跋(遠藤斌)・総目次・索引)
- 付録 文芸思想講演集(昭和12年10月刊)
- B4判・上製・函入・総1,104頁
- 本体揃価格 65,000円
- 推薦 尾崎秀樹・杉野要吉・日高六郎・松尾尊兌

川合仁の編集による文芸批評紙である本紙は言論統制下にあった、文学・芸術の自由を訴えた数少ないジャーナリズムであったが、昭和一七年八月より、日本文学報国会の機関紙としての役割を果たすことになった。

生方敏郎 主筆
古人今人 [全1巻]

- 昭和10年～昭和20年刊
- 解説(高橋新太郎)・総目次・索引付き
- 付『ゆもりすと』全2号
- B5判・上製・函入・総542頁
- 本体価格 18,000円
- 推薦 家永三郎・鶴見俊輔

戦前期における当代きつての風刺家・ユーモリストとして知られる生方敏郎の個人雑誌。軍国主義社会にあっても自由主義者としての気骨を失わずむしろユーモリストとしての真骨頂を發揮、軍部や戦時体制下の社会を痛烈に告発した。

太田棍太 主筆
現代新聞批判 [全7巻・別冊1]

- 昭和8年～昭和18年刊
- 別冊 解説(門奈直樹)・総目次・索引
- A4判・上製・総2,676頁
- 本体揃価格 140,000円
- 推薦 荒瀬豊・家永三郎・尾崎秀樹・久野収

ジャーナリスト・太田棍太が、十五年戦争のさなかに創刊したメディアの批判のメディア。既成ジャーナリズム批判は痛烈で、軍部や言論統制に迎合する新聞のあり方を糾弾し、ファシズムが荒れ狂う時代にジャーナリズムの主体の確立と連帯を訴えた。

大宅壯一編輯

人物評論



復刻版 概要

全五巻 別冊一

一九三三(昭和八年)三月〜一九三四年三月(全13号収録)
別冊「解説・尾崎秀樹・総目次・索引」
〔別冊のみ分売可〕本体価格「〇〇〇円」

大宅壯一(主宰)

推薦

小田切秀雄 + 佐高信 +
鶴見俊輔 + 松浦総二

〈体裁〉菊判上製 総二、五二四ページ

本体揃価格八五、〇〇〇円(税別)

一九九六年二月一括刊行



林房雄 昇天
林房雄、飛行士と志願す。「人は相争にせり、天を相争に安んずるは、
林房雄、飛行士と志願す。人の相争にせり、天を相争に安んずるは、
る」といふ。昨年来の彼の主張も實踐に導きかねたのである。

不二出版(株)

〒113 東京都文京区向丘1-2-12
電話(03)3812-4433
ファクシミリ(03)3812-4464
振替001602-94084

●本カタログ中の表示価格は
全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。
お近くの書店にご注文ください。